

廃棄漁網から生まれた地域ブランドの鞆

◆企業連携により、廃棄漁網を再資源化した生地で鞆の開発

海洋プラスチックごみによる生態系への悪影響が心配されているなか、廃棄漁網を再生して別の製品に作り変えていこうという動きが始まっている。

2016年の環境省の調査によると、国内の海岸に漂着する海洋プラスチックごみの内、漁網はロープと合わせると重量比で全体の4割を占めていた。また海に流出した漁網などは海洋ごみになると600年滞留するとも言われ、海を漂い続けることから「漁具の幽霊（ゴースト・ギア）」などと呼ばれている。

日本財団は、21年7月、海洋ごみの削減につなげようと、廃棄漁網を再資源化した生地で開発した鞆の発表会を開催した。この先導役となったのは、同財団が海洋環境保全とサステイナブルな社会実現を目的として20年に立ち上げた企業間連携組織「アライアンス・フォー・ザ・ブルー」で、現在、多種多様な企業34社が参加している。

廃棄漁網は、さまざまな素材があり分別が難しく、嵩張るので運搬コストもかかるなど、リサイクルするには課題が多いとされてきた。



写真提供：日本財団

◆単なるリサイクルではない「アップサイクル」の推進に向けて

今回の取組みは、北海道で回収した廃棄漁網を、東京のリサイクル会社がナイロン樹脂に再生し、大阪の織物会社が生地として蘇らせた。この生地を使って、鞆の産地として知られる兵庫県豊岡市の兵庫県鞆工業組合の加盟企業が、ファッション性の高い鞆に仕上げた。21年10月から、地域ブランド「豊岡鞆」の製品として、丸の内のショップやオンラインストアで一般に販売される。

こうした単なるリサイクルではなく、付加価値をつけて魅力ある製品に展開していく手法を、最近では「アップサイクル」と呼ばれ注目されている。米パタゴニアも、廃棄漁網から生まれた再生ナイロンを活用して初のアウトウェアを開発、21年秋から販売を始める予定だ。廃棄漁網のアップサイクル製品は海洋プラスチックごみへの関心を高め、流出削減につながる効果もある。【秋元真理子】